

武蔵野市エコプラザ（仮称）検討市民会議（第9回） 議事要録

日 時 平成29年12月7日（木）19:00～21:00

場 所 武蔵野市役所812会議室

出席者 委員13名、事務局3名

小澤（紀）委員長、鈴木（雅）副委員長、大沢委員、大谷委員、小澤（里）委員、上吉川委員、木村委員、塩澤委員、志賀委員、鈴木（圭）委員、田中委員、村井委員、郡委員

議事等 1 エコプラザ（仮称）のコンセプトについて

～武蔵野市らしさとエコプラザ（仮称）で大切にしたいこと～

2 環境フェスタ、エコマルシェにおけるブース出展について

1 エコプラザ（仮称）のコンセプトについて

発言者	要旨
事務局	<p>本日は、前回に引き続きコンセプトをテーマに、継承したい武蔵野市らしさや、エコプラザ（仮称）で大切にしたいことなどについて自由に意見交換していただき、今後の機能や空間活用の議論につなげていけたらと考えている。</p> <p>武蔵野市らしさの例としては、市民参加による新旧クリーンセンター建設の歴史や「武蔵野市民緑の憲章」、昭和62年という早期の下水道普及率100パーセント達成などが挙げられる。</p> <p>また、武蔵野市では多様な環境市民団体が活躍されているほか、企業や大学、商店街など多くの機関との連携の実績もあり、エコプラザ（仮称）の活動に協力いただける人的資源が大変豊富なことも、これまで議論されてきた。</p> <p>前回会議で確認した、「低炭素モデルの実現」、「地域力の向上」、「まちづくりとの連携」、「メタボリズム」や、その他幅広い視点からエコプラザ（仮称）で大切にしたい、継承していきたいことについて、自由にご議論いただけたらと思う。</p>
委員長	<p>先日、住まいやまちづくり、子ども、教育などについて話をする機会があり、武蔵野市は市民参加で様々なことを行っていると伝えたら、「武蔵野市のように歴史があるところと他では違う」と言われた。武蔵野市には市民参加が強く根付いていることを改めて認識した。</p>
委員	<p>新武蔵野クリーンセンター（仮称）施設・周辺整備協議会（以下「周辺整備協議会」という。）でエコプラザをリユースやリサイクルの施設ではなく、新しい価値を創造する施設といった視点で議論してきたが、何を原料にするかということが難しい。外国のチルドレンズミュージアムなどは、近くにある企業から出るシャーリング材やパイプ、反物などを使っているが、武蔵野市には目立</p>

	<p>った製造業もなく、工業地帯も準工業、住宅街なので生ごみくらいしか出ない。地域で環境を通したアート教育などをするとしたら、何を原料とするのか、なかなか難しい。吉祥寺北町の辺りも商店が減り、昔あった畳屋さんや表具屋さんなど、職人さんも見かけなくなった。武蔵野市で転用できる資源とは何か疑問に思っている。</p>
委員長	<p>日本では、ものづくりの原点が忘れられてしまっていて、デティールから考える発想が薄れているかもしれない。アメリカの子どもミュージアムなどは全部再利用で、ボストンやミネアポリスのミュージアムの建物は倉庫。子どもたちに入りたいという気持ちにさせるワクワク感を演出していて、素晴らしい。ボストンの主要な観光地の古い建物をめぐるフリーダムトレイルなどのように、ヒドゥンカリキュラム（＝学校で子供が暗黙に学ぶ・身体に染み込むような教育内容）があると良い。</p> <p>「食」で言えば、「エコマルシェ」や「オープンハーベスト」などのイベントで、農家さんも協力してくださっているし、アート系、デザイン系の人材もいると思う。</p>
委員	<p>大学もあるので、若い世代もいる。</p>
委員長	<p>若い人にエコプラザに来てもらう仕掛けをどうつくるか。</p> <p>ボストンの子どもミュージアムでは、ジャングルジムのような階段を上っていくと、窓から街並みが覗けるようになっている。隣のコンピューターミュージアムでは、キーボードやマウスの上によじ登って遊ぶことができ、単にパソコンで学習するものではない。</p>
副委員長	<p>私の大学ではアートデザインプロデュースという授業があり、大学院生、学部、学年を問わず受講できる。芸術や技術、デザインの先生が地域に関するデザインについての課題をたて、興味がある課題に学生が集まる仕組みになっている。私は農学とアートのハイブリッドなので、石岡市の果樹園でつくっている梨をブランド化し、パッケージまでデザインして考える課題にした。学生を連れて果樹園へ行って、農業指導員のレクチャーと一緒に受けながら摘果や剪定などを行い、できたものをどうやって売るかを考える。パッケージや売る人のファッションのデザイン、パンフレット、ふるさと納税のパッケージも決めた。</p> <p>他にも稲敷市のお弁当をつくるプロジェクトや、トンネルの壁画を描くプロジェクトがあった。壁画の方は近隣の小学校へ行き、学生が先生になって子どもたちに指導しながら実際のペイントまで、つくば市近隣の地域を巻き込み、地域と融合して取り組んだ。</p> <p>最初は文科省の予算で5年間のプロジェクトの予定だったが、5年後も自力で続け、グラフィックデザインの学生がプロジェクトのことを本にし、今年で</p>

	12年目となった。武蔵野市でも学生が先生になって、小学校や中学校で授業をして、地域と交流できると良いと思う。
委員長	そうした仕掛けについて、地域のお母さんたちから声が出ると良い。いきなり急展開だとハードルが高いかもしれない。
委員	以前、クリーンセンター運営協議会のイベントで、武蔵野美術大学の学生がペットボトルで大きなワニのオブジェをつくった。学生はその地域に長くいてくれるわけではないし、遠くから来ていて卒業していく。きちんとしたシステムがないと、一時的には良いが続けられないと思う。それが課題と思うが、その辺りをどうやってこられたのか？
副委員長	学年を混ぜたのが良かった。2年連続で授業をとっている子が引き継いでくれている。
委員	成績にどのように反映しているのか。時間もかかり、これだけに関わっているというわけにはいかないと思う。
副委員長	この授業に集中し過ぎて他の学科の勉強ができないというのはよくある。この授業にのめり込んでしまう学生もいた。
委員長	建築の大学でワークショップをした時に、その大学の教授が学生に「僕はグループワークで一生懸命やったのに、成績は一緒なのか」と言われてびっくりしたと聞いた。その評価は一時的な評価で、そこで何を得ていくかというのは、地域住民の方も一緒だと思う。新しい価値をつくる、共につくる共創は、成績よりも重要だと思う。教員の評価だけでなく、何を得たかを学生自身に書かせて、認めていかないと成績がすべてになってしまう。
委員	美術大学はすごく忙しい。課題だけで精一杯なのに、毎週のように来て夜遅くまで協力してくれた。こうしたことが仕事になればクリーンセンターに来たいのに、と言っていた学生もいたので、システムとしてあれば良いと思う。 私自身は40年くらい前に、武蔵野美術大学の卒業制作で世田谷の冒険遊び場をテーマにし、プレーリーダーとして参加し、数ヶ月だが通った経験がある。いろいろな大学、学年の学生がいて、とても面白い場所だった。地域の方々と毎週のように遅くまで話し合い、運営に関わり、子どもたちとも遊ぶ活動を通して、遊び場やこの活動を維持する大変さ、おもしろさなどを学ぶことができた。 大学の先生の理解や地域の方々や世田谷区の協力があり、様々な要素があったからこそできたと思う。
委員長	エコプラザに関しては、固定したものをつくるというより変容していくものを、どう取り入れていくかを伝えていく必要もあると思う。お互いに学び合いの関係性をつくっていき、市民と一緒につくっていくものだと思う。
委員	エコプラザをどう見られたいかと考えた時に、「コレクティブインパクト」の

	<p>成功例という形と、目指すところはSDGsと考えている。企業でもSDGsをどうしたら良いかわからない、どう進めたら良いかわからないという声を良く聞くので、企業と行政、NPOの三者がうまく連携した事例として、エコプラザで取り組みができれば良いと思う。</p> <p>そこに、メタボリズムの考え方を取り入れて、新しい形のものをつくっていったらと思う。</p>
委員長	「コレクティブインパクト」について詳しく説明いただきたい。
委員	「コレクティブ」は立場の異なる企業、行政、NPOの三者が協力して物事を行っていくという意味。NPOには市民やいろいろな人が関わっている。今までは、三者それぞれのやり方で課題解決を目指していたが、社会問題、特に環境問題は解決が難しいので、三者が一緒になって解決を目指していくもの。「インパクト」は成果を与えるということ。
委員長	<p>2003年にできた環境教育推進法が初めて法案に上がった時に、「コラボレーション」という横文字が入ることに驚いた。その後、環境教育推進法は環境教育促進法になり、来年3月末まで議論して法律を改定することになっている。特に基本方針で、コラボレーションの仕組みをどうつくるかというところが注目されている。環境省で行っている「環境教育等に係る体験の機会の場の認定制度」を利用し、川崎市が環境教育に関する体験ができる施設として民間事業者を認定しているが、エコプラザもそうした連携ができれば良いと思う。</p> <p>SDGsの17項目をどう考えていくかについては、企業や行政も関わる部分なので、いろいろな視点から取り組んでいくことができると思う。</p>
委員	企業・行政・NPOが連携して解決していかなければならないという意見には賛同できる。企業だけでは難しいということは、過去の公害の歴史を遡ればわかるが、企業と行政の2つだと何がだめでどこが限界だったのか。なぜ3つ必要なのかを掘り下げると、大事なのは、連携そのものではなく、連携することで初めてこれまでにないことが実現できるだろうということではないか。感覚的にはわかるが、もう少し深く言葉で説明していただきたい。
委員	それぞれの立場で見えている課題感が違うように思う。社会問題や現場の問題はNPOの方が知っていて、企業の方は見えていても全部ではないと思う。企業は利益活動が中心になるので、課題解決をしていく時に資源、人員を割くことができない。課題解決に対して本気になって取り組むことが難しいのだと思う。課題解決に取り組んでいるのはNPOや行政の一部で、活動を続ける資金を持っているのは行政や企業。それぞれが持つ弱みや強みが違うので、三者合わせて取り組んでいかないと課題の解決は難しい。そこでコレクティブという考え方が出てきたのだと思う。
委員	クリーンセンターの屋上にある野菜畑は、行政に見守ってもらいながら、ク

	<p>リーンセンターの運営主体である荏原環境プラント株式会社（以下「荏原環境プラント」という。）と私たちクリーンむさしのを推進する会（以下「クリーンむさしの」という。）で運営している。クリーンむさしのはNPOではないが、市民の団体なので、委員の今の話に近い。私たちはあまり縛りのない形で活動しているが、企業である荏原環境プラントは4月からクリーンセンターをDBOにより20年間運営することになり、初めての年がスタートした。企業側も、どのように私たちと向き合ったら良いかわからない状態だったと思うが、やっと呼吸が合ってきた。企業とNPO・市民団体の連携・関わり方は大きな課題だと思う。</p> <p>クリーンむさしのは市民団体と言いながら、活動に関わっている全員が会員ではない。ごみ総合対策課と協力して開催している環境講座の卒業生をヘッドハンティングしたりしている。会員ではなく、協力員として私たちに足りないものを補い、サポートしてもらっている。荏原環境プラントも私たちも、今まさにお互いに学んでいる。</p>
委員	<p>コレクティブ、協働は重要で、それを前提に考える必要がある。クリーンセンターは開かれた場と言いながら、土日は開いていない。お父さんが休みの日に子どもを連れて行こうと思っても、開いていない状況なので、企業である荏原環境プラントやクリーンセンター、私たちのような市民や市民団体が協力し、開くことができるようにしたいと思っている。従来のようなコミュニティでは踏み込めないかもしれないが、もう少し気軽に考えて、誰でも参加できるように風穴を開けることができるようになると良い。クリーンセンターのデッキを昼間開けることくらいはできるのではないかなと思う。</p>
委員	<p>2階のデッキを週末に開放してくれたら、隣の野球場で野球をしている子どもたちを眺めて、ついでにクリーンセンターを見るきっかけになるかもしれない。</p>
委員長	<p>周辺整備協議会でも、今検討している。</p>
委員	<p>行政も土日はお休みで、受託している荏原環境プラントも焼却施設を管理する職員以外はお休み。土日を開けるためには、ある程度の人数が出勤しなければならなくなり、難しいかもしれないが、どのように柔軟にやっていけるかだと思う。</p>
委員長	<p>働き方改革の話にもつながる。</p>
委員	<p>私たちの市民団体も、エコマルシェなど日曜日の催しが増えてきていて、少しオーバーワークなところがある。行政・企業・市民がみんなで話し合いながらやっていくしかないと思う。</p>
委員	<p>まちづくりの観点から見ると、あのような貴重な場所を閉じておくということは、マイナスでしかない。常に行くことのできる場所にしておくだけで、地</p>

	<p>域の魅力が高まる。同じようなことが陸上競技場でも起きていて、競技場はスタンドを桜の季節だけ開放しているが、一年中開けておけば子ども連れで遊びに行ける絶好の場所になる。子育て支援施設をつくらなくても、既存の場所を利用すれば良い。管理する側の都合が優先されているだけだと思う。</p>
委員	<p>行政・企業・市民の三者のインパクトを考えると、まったく常識が違う。行政は当然土日が休みだが、ごみを日曜集配にして、平日休みにした方が都合の良い人があるかもしれない。知人が府中に住んでいるが、その理由として、少し前までいつでもごみ出しができたからと言っていた。働く人の中には、時間に関係なくごみ出しができる方が良いと考える単身者もある。こうした民間と行政の常識が違うところがぶつかると、違う答えが出てくるかもしれない。</p>
委員	<p>図書館は土日も開館している。働き方に関しては、労働者の労働配慮がどこにあるかという話で、全ての行政が土日に閉まっているわけではなく、どこか折り合うところがおそらくある。</p>
委員長	<p>その仕組みをどう考えていくかだと思う。運営としてどう機能していくか。</p>
委員	<p>土日に働いている職員も多くいるので、行政側の人間の働き方が変わることは大きなハードルではない。ごみを巡る市民生活のリズムとの調和の話だと思う。</p> <p>今日、ごみ総合対策課と食品ロス問題について議論をした。武蔵野市でも食品残さが多く、忘年会シーズンなので、会議や宴会などで、最初の30分と最後の10分を食べることに専念する時間とする「3010運動」のことが話題になった。</p> <p>子どもたちに食品ロスのことを伝えるには、日本の食品ロスが年間600万トンあって、世界中の食べ物に困っている人を賄えるくらい食べ物を無駄にしていると教えるのは大事だが、子どもたちが身近な生活との接点をどこでどうつくり、リアリティを感じられるかが重要だと思う。</p> <p>子どもたちに環境の話をする時には、「今年の夏、カルビーがポテトチップスを売ることができなかったのはなぜか？」と聞くようにしている。カルビーは、基本的に海外から輸入したジャガイモを使わずに、北海道の自社の畑でつくったジャガイモを使い、品質を大事にしている。そのジャガイモ畑が台風で被害にあい、ジャガイモが全滅してしまったと話を見ると、良くわかってくれる。それをきっかけに、食べ物がどこから来て、どうなると採れなくなるのか、売っているジャガイモはどこから来ているのかなど、フードマイレージの話や、地球温暖化の話にまで興味を持つ。</p> <p>食べ物の大切さを伝え、食べ物を捨てるとうごみが増えるというところに行きつくには、子どもの生活の中でどう接点をつくるかだと思う。大人は自分と環境問題との関わりの接点をいくつか持っているので、1つ思い出すと頭の中で連鎖し、いろいろなことを思い出せる。そうした環境をどうつくるかだと思う。</p>

	<p>エコプラザでは、多様な環境のきっかけをたくさん用意して、想起していく活動にした方が良い。食品ロスの問題や、生物の問題など、どこかの入口から入ると、別のいろいろな環境問題を考えられるようになり、クリーンセンターがそばにあるのでごみを減らすことにつながると良いと思う。</p>
委員長	<p>気づきをどう促すか。気づいて、共感して、行動変容まで促せることが大事。子どもたちが生活の接点、場面から想定するということはとても大切で、ポテトチップスの問題も、北海道の台風で、ポテトチップス専用のじゃがいもをつくる農家さんが被害にあわれたことと環境とのつながり、温暖化や気象とのつながりのことまで学べるような機能を織り込んだ拠点となると良い。</p>
委員	<p>それを子どもたちに探求してもらいたい。探求する触手や接点をどうやって与えられるか。前回委員から報告のあった中学校で取り組んだ活動のように、花壇づくりから水の話や生物の話に生徒たちが興味を持ち、関連することを自ら調べて文化祭で発表した話から生徒たちが得たものは大きいと思った。</p>
委員長	<p>武蔵野市では、そうした授業ができる地域住民もいる。</p>
委員	<p>私たちは生ごみを堆肥化して資源化する取り組みを行っている。家庭での生ごみ発生抑制を目的に、できるだけ食品ロスを減らしましょうと訴えながら行っている。家庭でも堆肥化できるダンボールをつくっているが、堆肥をつくるだけではつらいので、堆肥を使ってクリーンセンターの屋上に畑をつくり、野菜づくりを始めた。堆肥づくり以外の活動が増えたことで、活動に集いやすくなった。この一連の活動が、食育の領域につながり、食品ロスも含め、年1回講習会を行っている。今後もごみ総合対策課と一緒に取り組んでいきたい課題。</p>
委員長	<p>いろいろな接点が考えられ、地域でいろいろな活動をしている人もいる。主体的に教えることができるし、子どもたちも学ぶことができる。そうした場をつくれば良いと思う。</p>
委員	<p>リアリティは重要だと思う。最近、めだかを小さな水槽で5匹ほど飼い始めた。一週間もすると水がにごるが、子どもたちと一緒に管理している。これを通じて環境は手を加えていかないと一定の状態には保てないことを子どもたちは感じ取った。また、日光を当てないといけないなど、複合的ないろいろな視点からの学びがある。</p> <p>フードマイレージという言葉があったが、アメリカ産の大豆を使ったしょうゆを一本買うのと、真夏にエアコンを2度ほど下げるのは、実はほとんど同じくらいの二酸化炭素を排出する。それを知って、しょうゆを国内産の大豆を使ったものにするなどの行動に変えてみると、わかりやすいし具体的な活動につながる。</p>
委員	<p>子どもの残飯を減らすには、やはりおいしいものを食べさせることが大切。学校給食では、武蔵野市の畑で収穫した野菜を使っている。環境を大切にしてい</p>

	いくのであれば、武蔵野市では今ある畑の面積をこれ以上減らさず、子どもたちが実際に畑に行き採るなどの体験を残してほしい。
委員長	<p>低未利用地が増加した「都市のスポンジ化」が大きな課題になっている。子どもたちが土地を活用できるようになると可能性が増える。</p> <p>めだかの水槽が汚れるのは新陳代謝をしているからで、人間に置き換えると、人間の出したものをどう処理しているのか、目に見えない物をイメージする力、またそれをどうしていくのかという探求する力にもつながっていく。</p>
委員	武蔵野市のごみは4割ほどが食べ物残さで、それをなんとか減らすことを伝えるには、リアリティを持たせないといけない。自分の活動領域との接点が見出せないと目標にしか聞こえない。生活との関わりが持てるようにして、自分からそこに入れるようにしたい。
委員長	学校教育で学んだことを自分自身でつないでいけるように、きっかけ・ヒントを与え、行動変容を促すような展開をエコプラザでしたい。誰が先生になっても良いし、一緒に学んでいくスタンスは、これまで議論してきたとおり。ここは素晴らしい地域だし、2階まで使えるようなので、拠点としての機能や空間の使い方、いろいろな人の関わり方など、多様性を認めていくような議論をしていくと良いと思う。
委員	そろそろ、周辺整備協議会で出したエコプラザ事業の中間まとめに立ち戻って考えた方が良くと思う。大切な柱は「学び」と「創造」と「交流」だと思う。そのためには、開かれた場、使い勝手の良い空間、聞く耳を持つ人が必要。以前「モヤモヤカフェ」の話が出たが、みんなで探ったり、実現したりする機能があると良い。例えば、展示、情報、それを伝える作業、工房、キッチン。イベントもあるから音響、照明も必要かもしれない。イメージを膨らませることで、エコプラザにとって必要な要素が見えてくるのではないか。
委員	以前、生ごみと落ち葉堆肥の話があったが、これを上手くコラボレーションできないかと考えている。冬は生ごみを堆肥にするのにすごく時間がかかり、大根の皮は刻んでお湯をかけると良い、カニの殻も刻むと良いなど、モヤモヤしながらも、いろいろとわかってくる。試行錯誤しながらいろいろなことができる場があると良いと思う。役所や企業、学校でも、モヤモヤをなくすことはとても楽しい。
委員長	コレクティブインパクトの実践になる。
副委員長	空間やプログラムを考えるのは大事なことだが、結局、大事なのは人だと思う。大学の卒業生がどんな仕事をしているかを紹介する展示会をやったところ、紹介したことがきっかけで、新しい仕事ができることになった。エコプラザができた時に、レクチャーをリレーすると、いろいろな人が出てくるような、人と人をつなぐ仕掛けがあると、AとBの化学反応が起こりやすくなると思う。

	<p>硬い組織や閉鎖的な組織だと、どうしてもマンネリ化するので、それをオープンなシステムにすると良い。武蔵野市には、これだけの人材がいるので、テーマごとに、食、緑というように枝分かれしていき、1つのプロジェクトが出来上がったら終わりではなく、その経験を記録として残し、人材バンクのようにしたら良いのではないか。</p>
委員	<p>組織のあり方もひとつの組織が取りまとめるのではなく、プロジェクト単位で人が集まって、解散することを繰り返すスタイルが武蔵野市らしさだと思う。コミュニティセンターは、それぞれのコミュニティ協議会に運営が任されている。そのために、元々は各施設で全く別のことをしていたが、コミュニティ研究連絡会を重ねていくうちに、情報が通じるようになり、他のコミュニティセンターで行っていることを形を変えて行うことも可能な環境になってきた。同じように環境に関心のあるグループが集合体のようになり、そこで手を挙げたらやりたいことができるような環境があり、それが連鎖していければと思う。</p>
委員	<p>答えや解説があるのではなく、とっかかり・クエスチョンがあり、興味を持って関わっていく施設になると良い。温暖化のことなど、どうしてもシビアな結論になってしまい、ソーラーカーの工作でせっかく楽しく入っても、結論をマイルドに伝えることができない。今日は勉強になったね、で終わらせない工夫が非常に難しい。</p>
委員	<p>エコプラザは他との違いがあった方が良い。野生動物の問題でもごみの問題でも、開発が進み、自然がどんどんなくなっている。一番環境問題を起こしているのは人間だということを見えないコンセプトとするのもひとつの方法と思う。人間が環境破壊をしているという謙虚な心が必要ではないか。</p>
委員長	<p>作家の司馬遼太郎は、大阪の国語の教科書に「21世紀の君たちへ」というエッセイを残している。20世紀の終わりに書いたものだが、人間は思い上がっている。私たちは自然や見えない力によって生かされているのだという謙虚な気持ちが必要と述べている。支え合うのが人間の社会であり、社会の仕組みをつくるのも人間であると言っており、こうした視点からの人の紹介も良いかもしれない。</p>
委員	<p>企業との付き合い方は難しいと思うことがある。担当者がすぐが変わったり、会社の方針変更で急に支援がなくなったり、そうしたことを何度か経験している。企業にとってはCSR活動なので、企業の自由だが、企業にとって何がプラスになるのかを把握しておく必要がある。</p>
委員長	<p>西宮のNPOで活動しているが、あるプロジェクトに企業名をつけてサポートしてもらっている。企業と一緒に育ち合う、学び合う関係をつくっていかないといけない。</p>
委員	<p>企業の場合は、割り切った対応をされることが多々あるので、どうしたら良</p>

	いかとは思う。
委員長	ここに参加している委員は、プロジェクトを起こす時には肝に銘じてほしい。
委員	先ほどのデッキの話について、今までは荏原環境プラントに対し、デッキを開けてほしい、開けた方が良くと要望するだけで終わっていたが、これからは開けるためにどうしたら良いかを一緒に考えることが大事だと思った。そのためには、行政にも企業にも聞く耳を持つ人がいて、そうしたモヤモヤを持ち込める場づくりが大事。エコプラザをそうした場所にしたいと思う。それをエコプラザだけに留めるのではなく、地域全体につなげていけばと思っている。
委員長	そうした雰囲気は、けやきや緑町のコミセンを見てもらうとわかるのではないかな。行政や企業と話す場、運営の仕方、窓口の対応など、情報があれば良いと思う。
委員	武蔵野市らしさをバージョンアップしていく必要があると思う。コミセンは武蔵野市らしさを象徴するものだと思うが、今までの利用方法では、若い人のニーズに合わなくなっている。施設を利用するには事前申し込みが必要だが、団体が利用することが前提となっている。いろいろな人に利用してもらいたいと思っているのなら、利用方法を変えた方が良い。緑町コミセンでは、事前申し込みがない日は自由利用にして開放する、もしくは、テーマを設定して、興味のある人は誰でも自由に出入りして利用できる場をつくらうとしている。公共施設の使い方もバージョンアップし、新しいニーズに合わせて変えていくことも大事だと思う。
委員長	「聞く」ではなく「聴く」の漢字が良いかもしれない。「聞く」では子どもは本音を言わない。
委員	私は子どもと接することも、お年寄りと接することもあるが、現場で「聴く」ということが大事だと思う。親子で畑に来る方に、クリーンセンターの屋上を見てほしいと紹介しているが、親子で来ることができる土日は実際には閉ざされている。一緒に現場に足を運ぶことが絶対に副次的に大切。私も企業人であった頃は、時間がなくて現場に足を運べなかった。現場で対話すれば解決するが、現場が開かれていないと対話もできない。
副委員長	クリーンセンターでゴミを燃やしている業務と、エコプラザでやる啓蒙的な事業とは、必ずしも合致させる必要はない。クリーンセンターの土日の啓蒙的なことをエコプラザの業務に入れたり、ゴミを燃やす事業と環境啓蒙の事業を建物で分けずに事業の中身で分けたりすれば、解決するのではないかな。そうすれば、屋上で野菜をつくることもひとつの形になる。インタープリターがそれにフォーカスする形でやれば、違和感なくできるし、多様なものを取り込める。
委員長	新しいクリーンセンターの角のパネルの前で、「これは平日だけで、土日はやっていない」と子どもが会話しているのを見たことがある。イベントの時しか

	開いていない。
副委員長	セキュリティなどのこともあるが、その部分は委譲するなど、方法はあるのではないか。
委員	クリーンセンターで考えるのか、エコプラザで考えるのかという道もあるし、いろいろな道がある。その発想を固定化すると解決から遠ざかる。
委員長	固定化することは、メタボリズムの思想に反する。
委員	<p>これまで私たちが企業に求めていたのは確かにお金だが、最近は人材を派遣してくれるということもある。来た人が学んで違う知識を得ることで、企業自体も徐々に変わっていくかもしれない。そのふれあいによって、それぞれが変わっていく姿がほしいと思う。</p> <p>大野田小学校の残飯を堆肥にするために、北町の方がリヤカーで畑まで運んでいた。子どもたちは、残飯を残しているが、北町の芋ほりをした時に、自分たちの残飯でおいしいお芋ができたことで気持ちが和らぐ。そうした関係性がわかることが、北町だけでなく、他の農園などでも展開できたら、NPOを運営している方たちも、関係性を大切にしたい農園づくりに関心を持たれるのではないか。そうした動きをここからつくっていけば、他の農園の中でもごみを出すだけでなく、堆肥にしていこうという意識になるかもしれない。</p>
委員長	今の時期はたくさん落ち葉も落ちている。
委員	落ち葉も放射線の問題などで、困っている部分がある。
委員	落ち葉は水や栄養を吸い込む最後の部分と考えられているので、農林水産省は放射線がある落ち葉を動かすとリスクがあるとして、非常に厳格に放射線量を測らないと堆肥として使わせてくれない。落ち葉の放射線量を市で測っているが、かなりお金がかかっている。
委員	クリーンセンターの放射性物質測定値もずいぶん半減しているが？
委員	半減はしているが、測定方法が厳密に決まっているため、測定をするために経費がかかっている。
委員長	ある中学生が、セシウムがどのように植物に吸収されるかを実験して、土からは吸収されないということを証明した。福島の子で非常に気にしていて、福島から発信したいという思いもある。今でも空気中に漏れているかもしれないので、いかんともしがたい部分もある。
委員	日本では少ないが、森林火災があると、木が吸った放射線が再放出されて、空間放射線の数値が上がる。
委員長	知り合いのいわき市の幼稚園が、園庭に落ちている石も全部測定し、お母さんたちにデータを示し、庭遊びができるようになった。データや科学的根拠に基づいてお母さんたちを説得する取り組みをしているところもある。武蔵野市のクリーンセンターもデータは示しているか？

委員	出している。解体しているクリーンセンターも、放射線の影響がないか全部測定して公開した。放射線に敏感な方は、クリーンセンターの内部であっても被曝しているのではないかと心配される。
委員	クリーンセンターから出す灰は全て、放射線物質測定をして結果が公開されているが、かなり減ってきている。
委員	東日本大震災以前の値より減ってきている。
委員長	心配される市民の方がいるということは、頭の隅に置いておかないといけない。
委員	生活との接点を持たせるということで、市民科学のような視点は良いかと思う。例えばゲリラ豪雨時に冠水被害が発生するが、連絡を受けて行政側が現場に到着した際には既に引いているということもある。そうした時に市民が写真を撮って送れるようなシステムがあれば、行政側も現状把握ができて対策を打つこともできる。市民も毎回データを取ることで問題を把握できるし、自分でも対策を取れる。今はスマートフォンでゲリラ豪雨が近づいていることが確認できるので、そうしたものを活用して市民が自分で対策をすることも可能。今回の施設は、施設に来てもらうこともあるが、来なくても環境に関心がある方は非常に多いと思うので、来館できない方、若い方にも参加できるような仕組みがあれば良い。
委員	市民科学は、国土交通省が立ち上げた制度。特に、下水は市民になかなか興味を持ってもらえないが、下水のことを研究している市民の方もあちこちにおいて、自分たちで研究していることを国や地方にフィードバックしようということをはじめた。武蔵野市では「水の学校」で実現している。卒業生の方が自主的に活動しているのが国交省の目に留まり、職員の方や大学の先生が「水の学校」を見に来た。
委員長	下水道協会でも同じようなことをしている。子どもたちもバクテリアが処理している現物を見て、感動している。
委員	リアリティが必要だと思う。クリーンセンターのごみをクレーンでつり上げ、焼却炉に送るところを見るだけでも、子どもにとってはリアリティがある。それに加えて、市街地に焼却施設があることは、武蔵野市の地域的な固有の問題であり、だからこそ地域の人たちにも関心を持ってもらうことができると思う。今回テーマである施設のコンセプトは、SDGsや低炭素などグローバルな課題解決というキーワードも大事だが、地域にとっての固有の課題を乗り越えることが大事だと思う。
委員	固有の課題だが、市民全員の課題。
委員長	クリーンセンター周辺地域以外の方で、ごみがどう処理されているのか理解できていない方をどう巻き込むかが固有の課題かもしれない。

委員	<p>当時、この場所にクリーンセンターができたことはインパクトのあるニュースだったと聞いた。そうした歴史も語り部として発信すると良いのではないか。</p> <p>コンパクトシティという話もあったが、もしかしたらこれが先進的なまちづくりの形かもしれないし、ごみマイレージみたいな考え方だと、実は新しい形とも考えられる。</p>
委員長	<p>クリーンセンターの歴史を知らない人たちもいるので、知ってほしいという思いがある。また、エネルギーの供給拠点、防災拠点にもなって、新しい機能を持たせている。エコプラザや芝生広場ができるともっといろいろなことができると思う。ぜひアイデアを出していただきたい。</p>
委員	<p>クリーンセンター周辺地域以外に住む方々が、日曜日にクリーンセンターに行きたい、子どもを連れて行きたい、という気持ちになる場所になれば良いと思う。</p>

2 環境フェスタ、エコマルシェにおけるブース出展について

発言者	要旨
事務局	<p>エコプラザ（仮称）の整備検討の周知と日常的な環境にやさしい行動を促すきっかけをつくることを目的に、11月12日の環境フェスタ、11月19日のエコマルシェにブースを出展した。エコプラザ（仮称）の整備・検討の状況や、地球温暖化に関するパネルを展示し、環境配慮行動を振り返るチェックシートとアンケート調査に協力していただいた。アンケート回答数は、環境フェスタは284名、エコマルシェは168名。チェックシートの集計結果から、環境にやさしい行動を日頃からとられている方が多いと感じた。アンケート自由記術欄には「日常生活を振り返る良い機会だった」「環境のことを考えるきっかけになった」などの記載も多く、チェックシートが効果的だったと思う。アンケートの詳細は後日改めて報告する。</p>